

---

# 亡国のファントム

柴田勇人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

亡国のファントム

### 【Nコード】

N3306Y

### 【作者名】

柴田勇人

### 【あらすじ】

男には、一つの誓いがあった。途轍もない憎しみを抱えた男は、ただ、奴らをどうやって料理してやるのか…という事だけを考えていた。それは、大切な人達を失った自分の勝手に決めた復讐劇だったのかも知れない。それでも大切だった…それは此処ではない…何処か遠くの世界の物語。主人公がバッタバッタ敵をなぎ倒して行く物語です。主人公は基本普通ですが、たまにクレイジーです。

## 一話（前書き）

感想や指摘などございましたら、教えてくれると、ありがたいです  
（ ^ - ^ ）

## 一話

朝日が大地を照らし出す頃、一人の男はその大地に寝そべり、ろくに疲れも取れない睡眠へ没頭していた。

思い思いの動物や鳥が鳴き、それに草と草の擦れる音が重なり、穏やかな朝を演出している。

男は目を覚ましたのか、体にかけていた黒いコートを持ち上げ、手を振る勢いのまま、コートを羽織る。

朝日の眩しさをその体に浴びると、軽く骨を鳴らし、また男は歩き始める……。

街に入ると、人々の喧騒が耳につき、寒ぎたくなるような騒がしさを作り出している。

俺はコートに着いているフードを深く被ると、出来るだけ目立たないよう意識する。

この街に入ったのは、宿と食の調達が目的だった。

俺は大通りである繁華街の端っこを淡々と歩き行き、目当ての物を探す。

「いらっしやい！どうだい、そこのお兄さん！今が旬の果物、ニプ口の蜂蜜漬けだよ！」

気前の良さそうなおばさんが、店の中からこちらに向けて言葉を投げつけて来る。

俺はそれを手で制し、また歩き始める。

一人無心に歩いているとようやく目当ての店が見つかった。

店の名前は『宿屋 良心亭』いかにもお節介なおばさんが経営してそうな店だったが、外装も割と良く、値段も手頃そうなので入ってみる事にした。より一層フードを深く被って……

「…いらっしやいませ。お一人様ですか？」

予想に反して、出迎えてくれたのは年若い少女とも言える女性だった。ブロンドの髪は肩まで伸びており、艶が手入れの行き届いている事を証明している。

俺がコクリと頷くと、少女はか細い声で話し始める。

「食事は二食とされています…。食事の際は食堂に来て頂きまして、注文をなさって下さい。」

説明を受け代金を支払うと、プレート付きの部屋の鍵を渡される。

番号の部屋に向かうため、階段を登ると、登った先の廊下の一番奥の部屋だと言う事が分かる。

鍵で扉を開け、中に入ると、荷物を部屋の隅に降ろし、直ぐ様コートを脱ぎ、手袋や靴も外すと、思いのままベッドに転がる。

腕で目を覆うと、聞こえてくる悲鳴と業火の焼けつく音。

俺は二度と安らかに寝れないのだろうか…

沈んだ気分のまま、俺は布団にくるまり一人考えていた。

。 。 。

朝一番から悪夢によって起こされた俺は、この感情を発散しようとして、宿の裏にある庭に来ていた。

ブオン！と剣を振る度に風を巻き上げる音が耳に響く。

俺は、愛剣である“グリオ・カラストロフィ”による剣撃を縦横無尽に、四方八方に振りまく。

それを一時間程続けた…。

いつもより長い時間剣を振っていたからだろうか…俺は腹が空いたので、宿付属の食堂に向かう事にした。

。 。 。

「知ってるか？最近ここいらでもアノ傭兵団が暴れまわってんの？」

一人の中年は暇な昼時にそれを話題として提示した。

「ああ、知ってるぜ。国仕えの迷惑野郎どもだろ？あの…何だっけ。

ああ、思い出した。聖角傭兵团だっけ。」

それを理解してるといった風に返答するもう一人の男。男は酒により酔いが回っているのか、赤い顔をしながらくっちゃんべっている。

「噂じゃあ、金品強奪は当たり前。いい女がいると連れ込んでやりまくってるらしいぜ?」

「けっ! いいご身分だぜ! やっぱし、王室著族はちげーってか? 何が聖角だよ…性の間違いじゃねーのか! ?」

男達は、周りを気にせず大声で笑い合っている。それを迷惑そうに見ている客も多々見受けられる。

だが、その中に明らかに違う色の目をした男が一人佇んでいた。

男達の舌が、遅れてやってきた料理を食らう為、休みを入れると、それまでフォークを人外の速さで動かしていた一人の男が近づいてきた。

「ちょっと悪いがお前ら…聖角傭兵团を知ってるって言ったな…」

男の声はそこまで大きくないはずだが、はつきりと二人の耳に入っていた。

「ああ? 知ってるに決まってるだろうが。てか、おめーこの街の間じゃねーのか? あいつらの話を好き好んでしたがるやつなんてこの街にはいねーだろうからな。」

「確かに俺はこの街の者じゃないが、その物言いは、お前らもこの

街の人間じゃないって言ってる様に聞こえるが？」

そこで男達は気づいた。この男の容姿、整った顔に、鋭い眼光。その目は何処か、無表情で、何かを忘れて来てしまったかのような眼だった。長い黒髪に、これまた、全身真っ黒の格好。さしずめ、暗殺者気取り。

「おう、俺らも遂この前此処に配属されてよ。てか兄ちゃん、何でんな事聞くんだけ？入団……って訳じゃねーだろ？」

「そんな事より、団長の名前は“リブロス”で合ってるか？」

「ああ、一際きつたね。傭兵の癖に貴族気取りのいけすかねーヤロ。だ。」

「そうか…邪魔したな。」

男はそう言つと、自分の部屋へと帰るのか、階段に向かって歩き始める。

「おい、兄ちゃん！まだ理由を聞いてねーぞ！？」

それは、別れのちょっとした決まり文句として利用したのかもしれない。

だが、男は振り向くと、片目だけ見えるようにして、酷く掠れた声で言った。

「あいつは殺す…それだけだ…」

その男が現れたのは、朝早く、料理長と打ち合わせをしていた時だった。ベルが鳴り、カウンターに戻ると“それ”はいた。

「君がアリスだね？」

その男は、眼に痛い色の衣服を身に纏ったこの街での“有名人”だった。

「は…い。」

どうしてこの男がこの宿に来たのか。

その理由は分からないが、取り敢えず嫌な予感だけしかなかった。

「どうして此処に…？」

「いやね…此処に可愛い子がいるって聞いてさ…見物に来たんだけど…うん、この街にまだ、これだけの上玉がいたとはね。僕の事は知ってるかな？」

「知って…ます。」  
最悪だ…

この人間は、名をリブロスと言い、今街で最高権力を持っている傭兵団の団長である。

「という訳で、一緒に来てもらいたいんだけど？」

何が“という訳”なのだろうか。男は嫌な笑みを億面も隠そうとせず、頼みに見える脅迫を言っただけだ。

その声を聞くだけで私の脚はすくんだ。

リブロスに眼をつけられた女性の話は聞いた事がある。

女性は当然、拒否し続けたようだが、業を煮やしたのか、リブロスは部下も呼んでその女性の経営してる店を破壊した後、意気揚々と女性を拉致していったようだ。

私の背筋をゾワツと悪寒が走ったのが分かる。

「そんな怖がらないですよ？今日は本当は様子見。一週間後また来るからさ。今度は頼りになる部下も連れてね？」

そう言うと、リブロスは気持ちの悪い笑い声を発しながら、店から出ていった。

私はその場でペタンと腰を下ろしてしまった。

途轍もない脱力感が体を襲い、もう何もやる気が無くなってしまった。

早く、逃げるにしても対策を考えないと、と考えたが、仕事がある事も関係して取り敢えず立ち上がる。

この店は、亡くなった母親の残した店なのだ。

その店を守りたいという気持ちと、恐怖から逃げ出したいという気持ちがちがごっちゃ混ぜになって、私の心の中で渦を巻いていた。

汚く、二つを天秤に掛けるように考えていると、不意にドアが音も無く開けられた。

入って来たのは真っ黒の…薄い、濃いではない。全くと言っていい

程に存在感の無い人だった。

。  
。  
。

恐怖から眠れず、次の日の朝、眠気を冷ます為に井戸水を汲みに行こうと思い、裏庭に足を運んでみると、見慣れない男性が一人で剣を振っていた。だが、服の色合いなどから、昨日宿を借りた人だと気付いた。

昨日はフードを被っていたからだろうか、顔をよく見てなかったが、今見てみると驚嘆した。

その男性の顔はとても整っていて、気を抜いていたら女性と間違えそうになる程だった。

その男性の剣の打ち込みの速さは、素人の私でも尋常ではない事がわかった。

邪魔してはいけないと思い、私は早く、水を汲んで宿に戻ろうと思ったが、その男の人を見ていると何故か足が止まってしまった。

その眼を見ていると何故か怒りがある様に、恐怖が宿っている様に見えてしまつて……。

唯の勘違いだろうけど、結局私はその人が宿に戻るまでずっと見ていた。

自分と重なる様にして……

。  
。  
。

あれから四日が経った。

約束の日まではまだ、3日残されているが、依然まだ、どうしようか決められていない。

逃げたいがそれは誇りが許さない……。

でも連れていかれるのは本当に怖い……。

街の人に聞いてみると、連れていかれた女性は、まだ、帰ってこないらしい。

店は手放したくない。

でも連れていかれるのも嫌だ。

私は母親しか肉親が居ないから、頼れる人も居ない。

(どうすれば……)

そう考えると、いつの間立っていたのだろうか。

私の横に人がいた。

「ひっ!？」

私は大きく仰け反り、滑って体制を崩してしまった。

転ぶ!と思ったが、体が受けた衝撃は意外にも危なげのないフワツとした物だった。

「そんな悲鳴を上げなくてもいいと思うけど……」

私の横にいた人が支えてくれたらしい。すぐに離れて、礼を言おうと、顔を見たが、その人は剣を振っていたあの人だった。

私は深刻な考え事をしていたからと言って、悲鳴を上げてしまった事に恥ずかしく思い、顔が熱くなるのが感じられた。

「え、あ、あの、なんの用でひょう？」

恥ずかしさのあまり、嘔んでしまった。

私はもうどうにも耐えられなくなり、顔を隠し、対面してる人の顔を伺ったが、反応はいいと言っていいのか、悪いと言っていいのか分からない物だった。

男の人はブツと息を吐くとそのまま笑いだした。

「べ、別に笑わなくてもいいじゃない…」

「いや、はは、ごめんごめん。すげー自然だったから。」

男性の声は、低くハスキーな感じの声だった。でも聞いているとても安心した。

「で？何の用ですか？」

つい、敬語が適当になってしまったが大丈夫だろうか…。

「ああ、ちょっとね。たいした理由じゃないんだけど、何か君が思いつめてる様な顔してたからさ。」

どうやら大丈夫だった様だ。

それにしても、どういづつもりだろうか…

この人は剣を持っていたところを見ると、

冒険者か傭兵か…騎士ではないだろうかどっちにしる、他人に気を  
使うだろうか？

私は怪しいな…と思いながらも、一応会話は続けるべきだと判断し  
た。

「勘違いですよ。すみません、気を使わせてしまつて…」

あの事は隠す事にする。

どうせ話したところで同情の念が強くなるだけだろうと思つたから  
だ。

何故かこの人にはそういう眼で見られなくなつた…。

「うーん、そつか。それならいいんだけど…」

そついえばまだ、名前聞いてなかつたね？」

名前？

今までも客に名前を聞かれた事はあつたけど、その全てが、交際目  
的だった。

全て断つて来たけど…

この人もそうなのだろうか。

「私の名前はアリスです。えっと…あなたの名前も聞いていいです  
か？」

怪しいと思つていたのに、ビックリする程自然に名前を聞いてしま

った自分に驚く。

「アリスか…いい名前だ…俺の名前はシュバルツ。シバって呼んでくれ。君はアリスでいいかな？」

シュバルツ…

「大丈夫ですけど…」

クールな外見からは想像できない程フレンドリーだった。

私は“シバ”という名前を忘れない様に胸にしまった。

「それで…用はもう一つあって…明日朝の8時に起こしてくれるかな？」

うちの店だけに留まらずこういったサービスはどの店もやっており、私はそれを了承した。

「はい、分かりました。」

男は、ありがとうと言つと、フードを被り店を出ていった。

「ふう…」

何故か私は胸がとても高鳴っているのを感じた。こんな事は今まで体験した事がなかった。

私はカウンターの椅子に座ると今日も客が来るのを待つ。

(あと、3日……)

私は嫌な事を思い出してしまい、それを振り払う様に頭を振った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3306y/>

---

亡国のファントム

2011年11月7日23時11分発行